

# 風のダドゥ

2006(平成18)年7月17日宣伝用ビデオ鑑賞(梅田ガーデンシネマにて公開中)

★★★★



企画・製作・監督＝中田新一／出演＝榎木孝明／木村文乃／勝野洋／井上晴美／古閑三恵／小林幸一郎／萬田久子／犬塚弘 (角川ヘラルド映画配給／2006年日本映画／95分)

……阿蘇山ふれあい牧場を舞台に、馬との対話と人生経験豊かなじいたちとの心のふれ合いを通じて、1人の少女が再生することに……。京大・阪大・大阪府大等の大学生の凶悪犯罪が世相を賑わし、精神的に病んだ少年少女たちが増えている中、たまにはこんな希望と再生の物語で心を洗いたいもの。圧巻はクライマックスで静かに語られるじいの遺言。あなたの頬に涙が伝わってくること請け合い……？

## 主人公は「どこにも居場所のない」16歳の少女……

私は鬼束ちひろの『月光』という曲が大好き。2000年に大ヒットしたこの曲をはじめてじっくりと聴いた時、一体どこからこんな歌詞を思いつくのだろうとビックリしたもの。以来、オッサンには珍しく私の美声で聴かせる(?)カラオケレパートリーのひとつとなった……。その『月光』の歌詞の中に、「どこにも居場所なんてない」というフレーズがあるが、この映画の主人公である16歳の少女、浅野歩美(木村文乃)の心境がまさにそれ。

## 少女の両親は？ なぜ少女は心を閉ざしたの？

歩美は中学校1年生の時に、やさしい父親を交通事故で失った。母親の亜紀子(萬田久子)はこんな父親のことを、「手先が器用なだけのダメ亭主」と娘の前で言っていたが、競争社会の中でバリバリと働く母親にしてみれば、ふがいない父親と映っていたことはまちがいない。こんな母親だから、当然娘の勉強や成績には厳しく、「歩美はやればできるんだから頑張りなさい」「そうしないとお父さん

のようになるのよ」といつも語りかけていた。しかし、実はそれは励ましの言葉ではなく、思春期に向かうわが娘にプレッシャーをかけ、母親にそして社会に対して心を閉ざすことになることを、彼女は理解していなかった。小さい時にわんぱく坊主たちからいじめられていた歩美を救いにきてくれた父親はもういない。自分を守ってくれる人はどこにもいない。自分は生きていても仕方ない。いつもそう考えるようになった歩美は、以降何度も自分で手首を切るようになり、今日もある山の中で1人……。

## 阿蘇ふれあい牧場とは？

社会や経済が豊かになるにつれて、なぜか子供の病いとりわけ精神的な病いが広く深く蔓延するようになってきた。それに対応して最近注目されているのが、アニマルセラピー。私もある中学生の少女をめぐる家庭裁判所の事件で、審判終了後、少女の再生のためにあるアニマルセラピーにつき合ったことがある。これは何も特別なことではなく、自然の中で動物たちとふれあい、その世話をしながら生活していくことによって、少年少女たちの心が癒され、開放されていくというもので、現実にな大きな成果をあげている。私の担当した少女の場合も、見事にこれで再生することができた。

この映画はそれがテーマであり、その舞台は九州・熊本にある阿蘇ふれあい牧場。この経営者は安藤幹夫（勝野洋）。そしてそこには、山中で倒れていた歩美を助け、牧場に運び込んだ老装蹄師の「じい」こと桜田源輔（犬塚弘）や、ある事件がきっかけで過去を捨てた元高校教師の楠田達夫（榎木孝明）らがいた。さらに、そこでホースセラピーを受けている子供たちの中には、あるきっかけで言葉失った少年、高柳慎也（小林幸一郎）もいた。偶然とはいえ、こんな環境の中に身を置くことになった歩美は、果たして心を開いていくことができるのだろうか……？

## メイワジョニーとのふれあいは……？

阿蘇ふれあい牧場にはいろいろな人が集まるが、馬の人生（？）だってそれぞれ千差万別で、それぞれの馬の事情があるのは当然……？ 競走馬として育てら

れたメイワジョニーは最後のレースにも勝つことができず、阿蘇ふれあい牧場に引き取られてきたが、勝つことだけをたたき込まれてきたこの馬は気難しく、その調教は容易ではなかった。しかしそんなメイワジョニーと「会話」できるのが、じい。「そんなバカな」と思いつつ、歩美がメイワジョニーに接していると、メイワジョニーも歩美の心の動きがわかるらしく、歩美にだけは親しげな対応を……。そしてじいの通訳(?)によると、メイワジョニーも歩美のことを好きだと言っているらしい……。そんな中、歩美とメイワジョニーとのふれあいと心の対話が少しずつ進んでいったが……？

## ダドゥとは？

この映画のタイトルとなっている「ダドゥ」という言葉が、何を意味するのかわかる人はまずいないはず。それは映画の中でじいの口から語られるが、ダドゥとは馬の腹に耳をあてて、耳を澄ませば聴こえてくる馬の腸の動きの音。すなわち、命の躍動する音。そして、それは阿蘇の山の中を駆け抜ける風のうねりのような音。この馬の命の音を聴くことによって、歩美は一体何を学ぶことができるのだろうか……。そして、あれほど気難しかったメイワジョニーを今や歩美だけが乗りこなし、メイワジョニーとの対話を深めていた。しかし世の中、そんな甘い話ばかりがいつまでも続くわけではなく、現実には牧場の経営問題が大きく安藤の肩の上のしかかっていた。

## 悪役はIT産業の雄……

昨年2005年の9・11総選挙への立候補を含めて、あれほど「時代の寵児」ともてはやされていたライブドアのホリエモンこと堀江貴文が逮捕されたのは、今年の1月23日。以降、今年6月5日には村上ファンドの総帥村上世彰の逮捕を含めて、IT産業の雄たちはヒーローの座から大きく滑り落ちていった。そんな状況下でつくられたせいかもしれないが、この映画には阿蘇ふれあい牧場に巨大な資本力を持ち込み、安藤と業務提携することによってここを利益追求の場にしようと企むIT産業の雄が登場する。安藤の妻がいつも言っているように、阿蘇ふれあい牧場は決して人助けを目的としているものではなく、経費を賄うだけの収入

は必要だし、歩美を預かるについても費用がかかることは当然。したがって、安藤もキレイごとばかり言っていたのではダメで、経営者として経営のことを考えることも大切。業務提携の話を持ち込まれた安藤はしばらくの間悩んでいたが、最後に下した決断はオーケーというもの。あの頑固一徹な夫が、やっとおカネのこと、従業員のことを考えてくれたと一安心し、大喜びした安藤の妻だったが……？

## 解きほぐされていくそれぞれの人生……

この映画ではIT産業の雄だけが悪役になり、あとはみんな「いい人」の役割を演ずるが、彼らの人生もそれぞれ……。まずは、じいの人生はかなりナゾに包まれたままだが、さすが年の功で、歩美や慎也君の心に対して及ぼす存在感は絶大。そして、それは生存中に限らず、死んだ後も……。

次に元高校教師の楠田も、自らの口からは決して語らなかったが、歩美が別れた妻の塚田麻子（古閑三恵）から聞いたところによれば、彼には凄絶な過去が……。そして楠田が心の扉を閉ざすことになったのは、歩美と瓜二つの女生徒の存在があった……。さらに、人生の苦悩はおじさんたちばかりではなく、慎也少年にも。彼が突然口がきけなくなったのは、一体ナゼ……。しかしその慎也も、骨折したメイワジョニーをやむなく殺そうとする安藤たちの姿に絶望し、自殺しようとした歩美を必死で押し止める中、奇跡的に「お姉ちゃん死んだらダメ！」という声が……。

その他、阿蘇の自然の美しい風景の中で、解きほぐされていく登場人物たちの人生はそれぞれ……。悩みを抱え、生きていく希望を失ったのは何も歩美ばかりではないということだ。しかし、それでも生きていかなければならないのはなぜ……。？ 静かにスローに流れていくストーリーを味わいながら、そんなことをじっくりと考えてみたいもの……。

## 一気にクライマックスへ

この映画には、心に染みる名言がいくつか用意されている。その第1は、「大切なことは馬と通じ合うことによって心が開くことなんだ」。そしてその第2は、

「生きることを難しく考えるんじゃない」。そんな言葉を味わっていたスローな展開から、後半はIT産業の雄が、無理矢理メイワジョニーを乗りこなそうとして振り落とされ、メイワジョニーも骨折したことが大きな契機となって、物語は大きく方向性を変えていく。そして、慎也君の言葉の回復によるハッピーエンドに続き、歩美も、完全に仕事を辞めて歩美と一緒に生活することを決意した母親とともに、この映画のクライマックスに臨むことに……。

そのクライマックスの舞台は、阿蘇の大パノラマの頂点に神秘的・神話的な姿で鎮座する押戸岩。そこに集まったみんなは、楠田が手にしたじいの遺言を聞くことになるが、さてその遺言には何が書かれているのだろうか……？

### ほんのヒントだけ——私の記憶の整理も兼ねて……

押戸岩のメインは、不思議な幾何学模様が線刻された龍頭石。パンフレットによれば、この模様は岩刻文字であり、古代シュメール語で「神・水（雨）・祈る」を、あるいは古代ケルト語で「太陽神」を意味すると指摘する声もあるとのこと。じいがいつもここに来ていたのは、龍頭石の間から出るご来光が美しいため。しかも、年に1度、8月1日だけに2つの石のちょうどてっぺんから出てくる神秘的な美しさはすばらしく、じいは少なくともここ10年間はその「権利」を独占していたらしい。またそれと同時に、じいが知っているこの朝の山のすばらしさも、ここ10年間じいが独占していたもの。すると、じいの遺言は、この特別な「遺産」を誰かに譲るといふものになるのでは……？

また、なぜ「ここ10年間」だったのかというと、その前5年間は、必ずここを訪れてくる小さな娘を連れて親子連れがいたためらしい。そして、その娘の名前はあゆみ。するとその両親は……？

ほんのヒントだけながら、この映画がこのクライマックスによって、あなたに大きな感動を与えること請け合い。世俗のアカにまみれてしまっていると感じているあなた、たまにはこんな心を洗う映画を観て、感動してみてはいかが……？

2006(平成18)年7月18日記